

静

岡山富士市に古谿荘という建物がある。

明治四十三年に竣工した洋館付き和風住宅（別邸）で、平成十七年に国の重要文化財に指定された。建て主は、宮内大臣を務めた田中光顕（一八四三〜一九三九）である。田中光顕は、いわゆる「普請道楽」として知られた人物で、古谿荘以外にも名建築といわれる住宅をいくつも建てている。古谿荘は現在、野間文化財団の所有で、重要文化財指定を機に、公開活用を進めるための保存活用計画を策定中で、筆者はその策定委員会の委員長を務めている。

このような話題を出したのは、現代の政財界人たちが、後に名建築と呼ばれるような家に住んでいないのではと危惧しているからである。まったくの憶測だが、彼らの多くは、都心のマンションに住んでいるのではなからうか。

名建築と呼ばれる建物の多くは、時代ごとの建築文化を代表する存在で、それは庶民の建築に大きな影響を与えてきた。例えば、古谿荘のような近代和風建築にみられる座敷のしつらえは、庶民住宅の和室や旅館などの宿泊施設の内装に取り入れられている。

それに対して現代はどうだろう。高層マンションも、庶民があこがれを持っているという点では、現代の建築文化をつくってはいる。とはいえ、高層階に住まいがあることと建物の質やデザインとは無縁である。高層マンションにもセキュリティ対策や免震装置の導入があるので、

各 人 各 説

普請道楽の施主を育てる

工学院大学建築学部建築デザイン学科 教授

後藤 治

Osamu Goto



質と無縁ではないが、それらは目に見えない質なので、「普請道楽」と言うには程遠い。

何を言いたいかといえば、つまり、政財界をリードするような立場の人には、質、デザインともにすぐれた家に住んで建築文化もリードする存在であって欲しいのである。この場合、家はメーカー住宅やマンションではなく、オーダーメイドかつ手仕事を重視したものであるべきだ。なぜか。建築文化をリードできるのは、あこがれの品であり、メーカー住宅やマンションのような大量生産品とは違うと思うからだ。少し手厳しく聞こえるかもしれないが、実はあこがれの品は大量生産品にも利益をもたらしてくる。なぜなら、大量生産品は、特注や手仕事の部分を機械生産に置き換えることで利益をえていることが多いからだ。

建設業界は、オーダーメイドで手仕事の家を建ててくれる「普請道楽」の施主の育成に、業界をあげて真剣に取り組むべきではないか。この原稿を読んでいる建設業界のリーダーたちは、いったいどの程度個性のある家に住んでいるのだろうか。かくいう私も、恥ずかしながらメーカー住宅の借家に住んでいる。それでは偉そうなおことは言えないので、現在地方で書庫兼別荘に使える古民家を物色中である。これからの時代の文化をリードする家のひとつは、もしかすると歴史的建築物を改修した住まいかもしれないと勝手に思っている今日この頃である。